



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

全てのカトリック信者に中絶反対を命じる

教会では何世紀にもわたって、神聖なる生命は、その始まりから終わりまで保護されなくてはならないと説いてきた。中絶について明らかな見解を打ち出して、中絶を認めるような例外はありえない。

第二バチカン公会議は「人間の生命は受胎の瞬間から手厚く保護されなくてはならない。中絶や幼児殺しは最も許し難い罪である」(CMW 51より抜粋)と見解をまとめた。ヨハネ・パウロ二世はワシントンDCで行われた講演で次のように述べている。「生命は神聖にして貴重な神からの贈り物だ。その生命が危機にさらされていると、声を大にして訴え続けよう。胎児の命の責が無視されている今、立ち上

がって、誕生前の命を奪う権利は誰にもないと主張しようではないか」

なんとのを得た明確な表現だろう！個人の意見としても社会の方針としても、中絶には断固として反対するのがカトリック信者の義務である。

この基本思想に、議論や意見をはさむ余地はない。生存権は人間の根源的権利であるという動かしがたい事実に基づいているからである。遺伝子工学の研究でも受胎のまさにその瞬間から唯一無二の生命が誕生する事は証明済みだ。この事実や教会の教えを疑問視する人は神から次のように問われるだろう。「しかしわたしは真理を語るから、あなたたちはわたしを信じない…わたしが真理を語っている

のになぜわたしを信じないのか」(ヨハネ福音書8:45-46)

教会は、政治・経済・社会秩序の中で明確な使命を持たない。あくまでも宗教的な役割として存在する。だが神の意志にそった社会をつくるための道し

るべや原動力は、教会から生まれてくる。私達は、信者としても、一市民としても、民主政治に積極的に関与する権利と義務がある。全ての人に公平に正義がゆきわたるよう、人間としての尊厳や権利が保証されるよう、務めなくてはならない。「価値観が多様化した社会において、いかなる宗教団体もその価値観を他人に押し付ける権利はない」という言葉に惑わされてはいけない。信教の自由と宗教の不毛とは一

致しない。歴史・伝統・文化の面から見ても、我々の住む地球は元来、宗教国であった。信者同士はもちろんの事、信者以外の人々の宗教観も当然尊重すべきである。しかし、だからといって、非信者がカトリックの思想を無視し、その歴史や伝統を無理やり変えさせるような事はあってはならない。

政教分離という比喻を文字通りに受け取ってはならない。この表現を最初に用いたジェファアソンは又「基本的人権と幸福が、決して損なわれる事のないよう保証する事が、国家がとるべき基本にして唯一の政策だ」とも述べている。彼の発言をまとめる、政府の本来の目的は生命の保護であって破壊ではないという事になる。

生存権こそ道徳の骨子であり、道徳は法律の基盤となる土台である。中絶は人道に関わる問題で、民主

主義社会においては万人に公平な手段でその是非を判断せねばならない。教会では胎児の生命を社会全体の幸福とみなして支持している。胎児の生存権を死守するとは、すなわち、殺人、幼児虐待、人種差別、わいせつ行為に立ち向かう事に通じる。「個人的には反対なんですが……」という言い方は、論理的にかなっていないし受け入れ難い。まるで、その人自身は幼児虐待に反対だと言いながら、他の人が虐待するのは構わないと言っているようなものだ。中絶は幼児虐待の最たる例である。人権にまつわる問題で、無垢にして哀れな胎児を合法的に殺す事をやめさせる以上に先決な事はない。

カトリック信者として、又、一市民として立ち上がり、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世が述べたように、誰にも胎児を殺す権利は

ないと呼びかけよう。民主的手段によって、神から授かった不可侵の権利である生存権を守り抜くのだ。

神様 あなたの教えに従い、我々の社会から非道の極みである中絶がなくなり、あなたが下さった命を守る事が出来るよう力を与えて下さい。

ジョン・カーディナル・クロール（元大司教）

甘美なる革命への招待

もう一人赤ちゃんを！

カイロで世界人口会議が行われている最中の九月のある日、ラジオを聴いていると、耳に入ってきたのは、あるフィリッピン青年の話。子沢山はもういやだ、と言っているのである。東洋で唯一のキリスト教国、そして、子沢山で知られたフィリッピン人らからぬことを言うものだ、聴き捨てならぬ、と思

いながら、聞いていて、あつと驚いた。彼が考えていた子沢山とは十人以上の子どものことであり、彼自身は結婚したら五、六人の子どもが欲しい、ということだった。さすが！

神が人を創造なさったとき言われた言葉は、「とても良くできた。生めよ、増えよ」であった。統計学上、二・二人が人口増減の境目、といわれるそうだ

が、実際問題としては少なくて三人の赤ちゃんを生むことが、神のこの誘いに答えることになる。二人赤ちゃんがいる夫婦にもう一人産むように励ます運動が旧ユーゴスラヴィアで始まり、アメリカでも今静かに広がっているのだが、ご存じだろうか。

ところで、カイロから流れてくるニュースを聴いていて、読者は何を感じられたであろうか。果たして、世界には人間が多すぎるのであるうか。確かに、発展途上国の人口の急増は事実ではある。しかし、それにはそれなりの理由がある。これらの国の人々は、生活のレベルが低く、乳児死亡率が高く、平均寿命も短い。早く結婚して、急増しないと自分たちが

この地上から消滅してしまつ、という危機感を本能的に持つからこそ人口が急増するのである。人口爆発ともいわれるが、それはまさに現状を何とか打開したいという民族の思いに他ならない、先進国はまさにこの点でこれらの貧しい国の助け手でなければならぬ。

これらの急激な人口増が見られる発展途上国の人たちが、地上の資源を過剰に消費しているから、将来の資源不足が恐れられるのであるうか、とんでもない。資源のあまりにも過剰な乱用は、むしろ、先進国に見られるのである。人口の多いことが、貧しさの原因ではなく、社会正義に基づいていない富の分配による貧しさが、人口急増の原因であると見る方が正しい。ガンジーがこの点に関してかつて言った言葉を味わおう。「すべての人の必要を満たすために

十分な資源が世界にはある。しかし、それはすべての人のどん欲を満たすためには十分ではない。」

ところで、具体的にいえば、ヨーロッパ、北米、日本などの先進国であるが、この中ポーランド、アイルランドの二ヶ国を除くと、すべてが、軒並みに人口減に悩んでいる。いや、悩むべきだといった方がいいのかもかもしれない。なぜなら、このような人口減は国家の緩慢な自殺行為に他ならないからである。各家庭という個人のレベルではなかなか気づかないかも知れないが、統計を見ても少し考えれば、それははつきりしている。ちなみに、女性一人が産む子どもの数であるが、ドイツでは、一般的に多子家庭であるトルコ人も計算に入れて、一人をやつと超える程度、つまり次の世代は半減してしまう程度の出生率しかない。最近、十日ほどド

イツに滞在する機会を得て、かなりあちこちと歩き回ったが、三人以上子どもを連れて歩いている母親には、悲しいことに、わずか四回しか出会わなかった。明らかな民族的自殺行為の結果であるを見た。ナチのユダヤ人大虐殺以上の規模で、生まれてくるはずの子どもが避妊、不妊手術、中絶行為によって、この世に生を受けなかつたといえる。西ヨーロッパの平均出生率は、わずかに一・五人である。まさに民族、国家の崩壊に他ならない。しかし、この点についてカイロの人口会議がなにか決議したという話は何も聞かえてこない。

世界でもっとも富んでいるといわれるアメリカ合衆国の場合は一・八人、あの人口希薄なカナダは一・七人、日本の場合は今年少し上向いたという朗報？にもかかわらず、惨めな一・四七人である。現

在の傾向がこのまま続けば、ドイツやその他のヨーロッパ諸国が、トルコやその他の移住者の国になる日が来るであろう。そして、そうなる前に、ボスニア・ヘルツェゴヴィナもかすんでしまうような血みどろの民族戦争が予想できないだろうか。最近のニュースによると、千人余りの中国人が日本に密入国したといわれる。さしずめ、日本は日本であること

を止めて、中国に飲み込まれてしまう、ということであろう、冗談だろうと思われれるかもしれないが、百年、二百年の単位で考えると、これは決して考え過ぎとか、間違いなどでなく、必ずそうなると思える。水が低いところに流れてくるのとまったく同じである。ただし神が国境を作った訳ではないから、将来、不法入国や不法残留によって外国人が日本や

ヨーロッパのキリスト教諸国を占拠してしまう可能性があるとしてみても、やかく言わないのが、真の国際人、真のキリスト信者がも知れない。それにしても、このような事態が、神様に「とても良くできた。生めよ、増えよ」と言われているにもかかわらず、自らの選択、または多子家庭を許さないような社会構造のせい、三人はおるか、一人さえも産もうとしない結果であれば、それは悲しい。

過去に滅亡して、ただ歴史の中にその名をとどめる諸帝国、諸民族はいくらでもある。同じような規模の民族自殺行為が、実に惜しく、残念であることの理由は数多くあるが、その中の一つを簡単に述べよう。先進国には、胸を張って世界に後代まで誇れるような業績が多々ある。私たちが日本人も、世界に誇り、世界に貢献できる工業製品、

芸術、文学、医学その他多くの分野で世界に誇りうるものを持っている。このすばらしい私たちの国が、他の先進国とともに、そのテクノロジーと資金を活かして発展途上国の資源を開発し、その人々の生活レベルを上げることが

できる。そうすることに、人口サミットの主張する急激な人口爆発にストップをかけることもできるのである。ただ残念なことに、肝心の人間が、先進国では死に絶えつつある。ここらあたりで、この自殺行為、つまり、避妊、不妊手術、人工中絶に見切りを付けて、少なくとも三人の子どもを生み始めなければ、その結果が、発展途上国にとつても悲惨なものになることは確かである。少なくとも三人の子どもを産もうというこの運動は、先進国の生き残り、全世界の幸せを目指した

最後の賭である。私は密かに、この運動を「甘美なる革命」と呼んでいる。三人目の赤ちゃん、大きくなったら、さあ、何になるのだろう。最後にマザー・テレサの言葉をじっくり噛みしめていただきたい。「その生まれて来ようとする命を殺し、その未来まで殺してしまう国以上に貧しい国はない。」

カトリック司祭

成相 明人

求めても得られなかったアドバイス

十八才の時、私は両親に強く反対されている相手と付き合っていました。そこで、両親は私とある「取引」をしました。彼と別れば、大学へ行かせてくれるというのです。私はこれを了承しましたが、本当に守ろうとは初めから思っていないませんでした。

妊娠している事に気付いたのは、化学の授業中において気持ちが悪くなったからです。友達が街の医者にかかるよう勧めました。医師はすぐに妊娠と診断し、「また一人か。まだ若いのになんて事だ」と言いました。そして、彼は私に心配しなくてもうまく「処理」出来るからと言いました。赤ん坊を生む事など一言も触れず、最寄りの中絶クリニックを紹介しました。

宗教的に確たる信念があったわけではありませんが、最初にそのクリニックへ「診察」を受けに行った事で、後味の悪い思いをしました。看護婦は手術を受けるためのお金を持って、一週間以内にもう一度来るように言いました。

それまでに中絶については話を聞いた事があり、多分間違った事だという事も分かっていました。それでその一週間の間、私は友達や先生にアドバイスを求めました。ある女性の先生は手術を受けるように勧めました。彼女は自分も何回か中絶した事があり、それは、何でも無い事で、そんな苦労は今の私には必要ないと言いました。誰も、養子に出す事や子どもを育てる事などは一切勧めませんでした。実は

相談した先生の一人は修道女でした。今思うと、私はその時誰かに「そんな事はしてはだめ」と言つて欲しかったのだと思います。でもその修道女ですら、中絶が一番いい方法だと言ったのです。

私のボーイフレンドにはお金がなかったため、両親が手術の費用を出してくれました。両親の前で中絶は間違っていると、泣き崩れた時、彼らは手術をしなければ私を家から放り出すと言いました。父は、茶色い肌の赤ん坊など自分の家に入れない」と言いました。(私のボーイフレンドはイタリア系フェルトリコ人でした)そして、もし子どもを生むなら、全く自力で生きていけると言われ、私はこの事態を避ける手立ては何もないように感じました。

手術の日、ボーイフレンドと学校の友達が一緒に来てくれました。手術に反

対する人は一人もいませんでした。実際、この危機的状况にあった間、私は一度も中絶反対についての話も、またそういう人々の話も聞いた事がありませんでした。

ある部屋に入っていくと、そこは私と同じように自分の赤ちゃんをおろすのを待っている女の子達でいっぱいでした。誰もしゃべらず、誰も他人を見ようともしませんでした。一人一人、名前を呼ばれて行きました。

私は感じるかも知れないと言われた苦痛をとて、私も恐れていました。カウンセラーと話していてもほとんど泣いていました。しかし彼女も私がこれまで相談したみんなと同じ意見でした。子どもを持つべき時ではない、まだ若すぎるし、子どもを育てるにはお金がかかる。たった一人で子どもを育てるなんてとても大変だ、だからこれ

が一番いい方法なんだ、と。

私はこういう事を自分に言って聞かせながら、名前を呼ばれるのを待ちました。ただ一刻も早く終わらせてしまいたい気持ちでした。

ついに私は中に入るよと呼ばれ、台の上に寝かされました。拡張機はとても苦痛でした。カウンセラーが私の手を握り、すぐに終わるから泣かないようにと言いました。

吸引機がとても大きな恐ろしい音を立てていました。自分に起こっている事から気をそらすために、天井には絵がはってありました。その絵のイメージは私の記憶にくっきりと焼き付けられました。私は絵の中の雨の中を歩いている人々を見ている間に赤ん坊は取り出されしました。

私がクリニクにいる間、ボーイフレンドは酒を

飲んで酔っぱらっていましたが、私を車で家に送るなど、到底出来ませんでした。彼が遅れてくるまで、私は出血したまま、恥ずかしい思いでクリニクの前で立っていました。

寮の部屋に戻った時、私は泣いていました。どんなに恐ろしい思いをしたか、どんなに子どもを生みたかったかをみんなに話しました。ボーイフレンドは私をあざ笑い——あざ笑ったのですよ——「ふしだらなお前がいけないんだよ！」と言ったのです。男の子の一人が彼をつまみ出そうとして、けんかになりました。恐ろしい光景でした。彼は事態を乗り越えようとして酒に酔ったに違いありません。心の底では手術が間違った事だと知っていたのです。彼は私を責める事で、その責任の重荷が自分の肩にのしかかるのを防ぎたかっただけなのでしょ。

最終的には、中絶はみんなが約束したように、私の全ての問題を解決「しませんでした。両親はやはり私を追い出しました。私は学校をやめなければなりません。ボーイフレンドと結婚しましたが、うまくいきませんでした。彼がアルコールとドラッグの中毒になりました。私を殴るようになり、他の女性を連れ込みました。

ある夜、酒を飲んで騒いでいるうちに、彼は私の胸にナイフを突きつけました。私は殺してくれ、死にたいからと言いました。私には何もありませんでした。両親も、子どもも、プライドさえも。どうして夫が私を尊敬する事が出来るでしょう。私は私達の子どもを殺してしまっただけです。どうして毎日、鏡の中の自分を見る事が出来るでしょう。私は人を殺したのです。私はその時本当に死んでしまいたかった

のです。この事があってまもなく私達は別居し離婚しました。

私が中絶を受けたのは十年程前の事です、私にとっては遠い昔のひどい悪夢のようなもので、忘れ去るのが一番いい事なのです。今周囲にいる人々（再婚した夫、教会の友人達など、私が尊敬している人）には、中絶の事は話していません。話せないのです。話せばきつと私を違ったふうに見るようになるし、それが私には耐えられないからです。

その後、私は子どもを一人人生み、今又妊娠しています。子どもたちは私の喜びであり、神からの私への許しです。幼い息子は何物にも代えがたい程すばらしいのです。赤ちゃんがどんなにかわいくすばらしいかを知ってさえすれば、私は手術など決して受けなかつた事でしょ。

私は今、地域の中絶クリ

ニクでデモし、新聞に手紙を書いて、中絶反対グループに寄付をしています。こつした事で、少しは気持ちが悪くなっています。最低でもこれくらいは事はしなければと感じています。

私の人生は中絶によって挫折した事は明かです。感情的にも、手術の前と後では私はすっかり変わりました。手術がきっかけで、私の人生は転落しました。家族も、最初の結婚生活も、自己イメージも、全て破綻しました。中絶後、何もかもがすっかり変わりました。

今となつては、嘘を聞かされていた事、自分の中に真実を抑え込まれていた事、事実をもっともらしくこじつけられていた事が分かります。私は今、妊婦として医師の診察を受け、私の子宮の中にいる赤ちゃんを見ます。赤ちゃんの鼓動が聞こえるように

なつてきます。何事についても赤ちゃんの健康のために最良の方法を教えられています。

私の話を皆さんにする事が出来て本当に嬉しいです。中絶した事を告白する事は出来ないかも知れませんが、中絶と戦う事は出来るのです！

コリンさん 26才

性行為感染症／エイズ患者を病院で看護する心理・社会的側面

人間は、肉体と、心と魂から成る合成物です。そしてエイズとはその個人全体を冒す病気で、肉体を破壊するだけではなく、心をも破壊してしまいます。エイズなど性行為感染症になった場合、それとともに深刻な感情的、精神的、社会的、行動学的な問題が起こることになるのです。

患者の心理

社会的問題

1 不確実さ・・・エイズなど性行為感染症にかかった患者が直面する心理学的な問題は、不確実な要素とそれへの対応についてめぐっているのです。不確実な要素とは、希望、人生一般への可能性、家族、職業、治療の効果、病気を持った人への社会的対応などです。

2 恐怖・・・患者は多くの恐怖を感じます。死ぬことへの恐怖、苦しみながら孤独に死ぬことへの恐怖、そして病気に対する恐怖。看護をする上で、病状に

関する正確な情報を、明確に鋭敏に相手に与えられることが必要となります。患者が恐怖を伝えるのに必要な時間と機会を患者に与えてあげましょう。その患者が、家族や友達、あるいは医療関係者やカウンセラーなどと共に、問題をどう扱うかについての解決策が得られるように手助けをしましょう。

3 喪失・・・エイズ患者は、以下のものに対する感情の喪失を経験します。自分の人生、向上心、肉体的な魅力、性交能力、性的関心、社会における地位、安定した経済的自立、自分の人生の管理、そして最も重

要である信頼とプライバシー。この様な問題に取り組むとき、看護人は鋭敏で、理性的であつて、そして何よりもまず感情移入できる聞き手となる事です。そして、患者が自分の感情を素直に表に出せるように患者を勇気づけなくてはならないのです。

4 悲しみ・・・これは感情の喪失によって結果的に起こります。患者の家族や友人達もまた、患者の健康状態が悪化するにつれ悲しみを感じるようになることもあります。このような状況に置かれた看護人は、彼らのこの

感情を正常なものとして受け入れ、それを表に出させ、それに対して現実的に対処させるようにするべきなのです。

5 罪の意識・・・患者は以下のことに対して、罪の意識を感じます。
a 他人に感染させてしまった可能性、
b 感染するにいたった可能性のある自分の取った行動、
c 家族や愛する人に負わせてしまった悲しみや負担、
d 実現させることのできなかった過去の様々なこと、それを実現させるための機会も可能性ももう無

い

いかも知れないこと。

罪の意識を持ち、それを克服しようとしている患者を助けるには、看護人は必ず患者が自由に自分を表現できるように助けてあげなくてはなりません。

そして、その患者の感じていることを、聞き、理解しなくてはならないのです。絶対に批判的な態度で応じてはならず、相手の身になって理解を示すべきなのです。患者が泣くようなことがあれば、そうさせてあげることです。泣くことは一種の感情的開通法になるからです。

6 うつ病・・・これはエイズ患者に最も共通して起こる感情的な問題です。その理由の一つとして、病気に對する治療法がないと言ったことが挙げられます。そしてそのことが、定期的な医療検査を必要にさせ、自分の無力さを感じさせ、自己管理能力を失わ

せ、人生そのものの喪失を実感させ、経済的な負担を大きくさせたりするので

7 拒絶・・・拒絶は一般的に起こる感情的な反応です。事実、クブラー・ロス医学博士によつて確認されたように、拒絶は死にかかっている人が通常示す反応の一つです。末期症状の場合、その初期段階に表れる拒絶反応は、陽性の反応と見られます。なぜならば、ショックを受けた時にそれに対処する精神構造がそのようになつて

いるからです。しかしながら、それが長続きするようではかえつて効果が無く、それ故に患者には危険なのであります。

このような場合、看護人は患者に正しい情報を、正直に与え、患者が自分の容態を受け入れるようにさせなくてはなりません。そして患者がそれを受け入

れるのに必要な十分な時間を与えることです。

8 怒り・・・患者は外に向かう怒りを持っていきます。それは自分以外の人の不注意、あるいは事故によつて自分が感染することになったことを、不公平であり不運であると感じているためです。病院のスタッフが自分と自分の要求に對して鈍感である、ということに患者が怒りを

持つ場合もあります。患者は後々その怒りに對して自分を非難する場合があります、そのことがうつ病や自滅や自殺につながることもあるのです。

9 自殺的行動と自殺的思考・・・性行為感染者は自殺を企てるとても高い危険性を持っています。自殺には積極的な場合と受動的な場合があります。積極的な自殺の場合、患者は故意に死につながるよう

な危害を自分に加えようとし、受動的な自殺の場合、患者は死が早く来るように、生命にかかわる可能性のある併発症が出て

いることを黙っていたりするのです。

自殺をしようと思つていたり、試みたりする患者を看護する時、生命が危険に陥るような行動を全て防がなければなりません。我々には、生命を守る責任があるのです。看護人は患者をその感情とともに受け入れ、同情を示し、苦痛とストレスに對処するよい方法

を教えずにはならないのです。

10 自己尊重の喪失・・・エイズ患者など性行為感染症の患者は、自分の自己尊重が脅かされている、あるいは自己尊重を喪失してしまつた、と感じて

います。愛する者や、同僚・知人に実際に拒絶されたり、拒絶されていると感じる

ことが、自己尊重の喪失が起こる原因になります。そしてこのことから信用を失い、社会的立場を失い、その結果自分の価値が低下していると感じることになるのです。さらに、性行為感染症によつて、外観に影響が出たり、肉体が衰え、力と身体全体の管理能力の喪失などが起こるのです。

11 心気症と妄想の段階・・・この段階では、患者は些細な肉体的変化も含めた健康状態のことが気がかりでしようがなく

なつてしまいます。特にこのような状態は、病氣に對

応するのに困難を示した患者に多く見られます。心気症を持つた患者に

直面した場合、看護人は患者の気持ちを理解し、ことが重大である場合があるので、患者の訴えに気を配らなくてはなりません。ことが重大でなくても、患者

に気を配ることによって、患者の心痛を軽減させられることがあります。

12 不安・・・不安の原因は数多く挙げられます。病気の予知のしにくさ、他人に感染する危険性、社会・職場・家庭における敵視、拒絶、そして孤立、肉体的

苦痛と不自由さ、自己喪失、経済的負担、家族の対処能力に対する不安、これらのことがさらに二次的な不安を生み、精神的な事柄への興味を増加させ、宗教的な支持を求めるようになるのです。患者が許しを請うために過ちを認め、罪を告白して、調和と受け入れを示すこともありませぬ。看護人として、私たちは助力を与え、精神的な支持を与え、もし望まれたならば患者と一緒に患者のために祈ることもしましょう。

今まで記してきたのは、エイズなど性行為感染症に冒された患者についての幾つかの問題です。患者

が家族や友人から拒絶された場合や、普通の社会的関係に対して非社会的な場合に、問題はさらにはつきりとシビアになります。

支援団体を利用することによって、たくさん的心灵・社会的支持が得られます。もしそのような団体が存在しない場合、私たちが患者を刺激し、団体を結成させることもできます。

最後にエイズ患者の間性と感情的問題は同等に重要です。そして、看護婦などの健康管理の専門家、患者の心理・社会・精神的要求を満たすために個人的責任及び専門家としての責任を果たさなくてはなりません。

「ボンベイ Hinduja
National Hospital」

アグネス・マッシュウ

「看護婦長」